

# 魯迅とアーサー・スミス、安岡秀夫の中国国民性に関する語録の比較研究（下）

范伯群 澤谷敏行

## 第三章

この一章は主に魯迅の安岡秀夫の『小説から見た支那の民族性』に関する意見、そして同時にわれわれは魯迅が安岡秀夫をどのように見ていたかを論述する。

上篇において紹介したが、魯迅は再三にわたって「小説から民族性を見るというのも、なかなかよいテーマだ」<sup>(46)</sup>と認めている。一方で具体的に安岡秀夫の論著に話が及ぶと魯迅はあまり感心しなかった。当然一部は肯定したが、貶すところが結局多かった。しかし、これらの意見は中国の『魯迅全集』の注釈よりはかなり寛容である。中国の『魯迅全集』の編集者の注釈は以下のようなものである。「中国民族を中傷した書物である」<sup>47</sup>。「本の中で、中国民族に対して勝手ほうだいに中傷をおこなっている」<sup>(48)</sup>。では注釈は魯迅が言うところの「いくつかの的を射た点」はどのように解釈できるのか。魯迅は読んで「的を射ている」と感じたので、彼はこういっている。「これは支那人である私からすれば、確かに背に汗の流れる思いがする。」<sup>(49)</sup>このような（中国民族を中傷するという）注釈は魯迅の本意とは違うと思う。

スミスと安岡秀夫に話が及ぶときは、いつも魯迅は行間に言外の意味がある。常にスミスは安岡よりも一つ高く持ち上げる。われわれも魯迅の評価は理にかなっていると思う。評価上の高い低いから魯迅は人々に再三にわたってスミスの『支那人気質』を翻訳することを勧めた。しかし、安岡秀夫の本についてはこのような「提案」は一度もしなかった。だが、われわれ論文を書く者の任務として、事実を追求し安岡が引用したたくさんの中国の明清の小説で結局どこが「的を射ている」のか、またどこが「無理にこじつけた」のかを分析する必要がある。

総合的に安岡秀夫の著作を観察すると、われわれは個人的には安岡はスミ

スのような豊富な直接の資料（経験）を持っていないと考える。安岡の中国の民族性への理解はスミスのようにはっきり述べられていない。しかしわれわれは彼がたくさんの彼なりの優れた点を持っている、われわれが過去に見落としていることを認めた。以下は我々が魯迅と安岡秀夫の考え方でどれくらい共通点があるかを詳しく比較し、はじめて客観的にかつ適切に真の価値を見出し評価できるのではないだろうか。例えば安岡の著作の「総説」の次の第二章「過度に体面儀容を重んずる事」では、彼はスミスの「面子（メンツ）」（体面）の他に、加えて「容儀」について提起している、この容儀は当然「外見を重視すること」を指す。この外見を重視するのも「面子（メンツ）を保つ」に関係している。彼が挙げた事例は魯迅がよく取り上げている物語とぴったり合っている。彼は言っている。

支那人に最も著しい傾向の一つは、過度に体面儀容すなわち『面子』を重んずることである。……この点における支那人の傾向は、その長所美点といわんよりも、むしろ弊風と言うべき程に、度を過ぎているのである。

まず極端な例から挙げると、有名な子路の戦死である。子路が衛に仕えたとき、同国に内乱が起こり、その味方した側が、戦い敗れて、なお乱戦中の場合、敵兵のために斬り付けられて、冠の纓（えい、あごの下で結ぶ紐）を断ち切れ冠が落ちた。そのとき子路は「君子は死すとも、冠を免かず（ぬがず）」といって、冠を取り上げ悠々と纓を結んでいる間に、滞りなく殺されてしまったということである。如何に体面儀容を重んずるからとて振り上ぐる刃の下でまで、之に心を奪われるとは、とても極端な話である。<sup>(50)</sup>

魯迅は「雑文」と「書信」（手紙）の中で、再三この子路のことを取り上げて、子路のこの古臭い観念にとらわれた行為に対して不満を表している。その上魯迅は、さらにこのような行為は孔子が彼に与えた教育だと指摘している。

併しその由（子路）たる者もその後敵人との戦闘の最中に冠の紐が切られてしまった、さすがに由である。こんな時で夫子（孔子）から聞いた教えを忘れずに君子は死ぬときも冠を落とさずとってその紐を結び直しながら敵に滅茶苦茶に切られて死んでしまった。唯一信用すべき弟子を失ったから孔子様。無論大に悲しみその事を聞くと直ちに臺所にある叩き肉を捨てろと命じたそうだ。<sup>(51)</sup>

子路先生はたしかに勇士です。だが彼は「吾は君子の死するや冠を免（ぬ）がずと聞」いたために、それで「纓（えい）を結んで死」んだわけです。どうしても少々愚直な気がします。帽子を一つ落としたぐらい、何がかまうものですか。それなのに、こんなに重く考えたのは、実際、仲尼（ちゅうじ）先生のワナにかかったのです。仲尼先生自身は「陳蔡に厄せされ」たのに、決して飢え死にしなかった。誠に見あげた狡さです。子路先生がもし、彼のでたらめを信じず、髪をふりみだして戦っていたら、死ぬようなことにはならなかったかもしれません。だが、この髪をふりみだす戦法こそ、ほかならぬ私の、いわゆる「塹壕戦」に属するものです。<sup>(52)</sup>

安岡秀夫と魯迅は共に子路の死について触れている。しかし重視する点は異なっている。安岡からすればこれは儀容を重視しすぎること、つまるところあご紐を結ぶのは「面子」の問題である。一方魯迅は孔子の「滑」（その場しのぎのごまかし）と子路の「迂」（時代遅れ）として分析した。もちろん、君子の風格を保つ上でこれも「面子の問題」と関係がある。中国のことわざ「衣服を見て人を見ず」というのがあるが、大体このように、ただ人の外見や儀容を重視して国民性をシンボル化した表現である。

安岡は『観音菩薩托夢』、『義犬』などの小説を挙げ、中国人の面子重視を例証した。「（支那人は）死んだ後までも、死骸の体面容儀を心配するとは、極端な訳である」「支那人は、生活は体面にあり、死もまた体面であるといえる国民性である」ただし、われわれは安岡の「義犬」の中の「全尸（屍）」（死体を完全な状態に保つこと）のことをあまり理解していないように考える。

実際に「全尸（屍）」と「面子」との関係はあまりないを考える。中国の古籍あるいは民間の物語ではよく「鬼世界」が取り上げられる。そしてこの珍奇な世界でどのような死に方であるかと以後の「形象」（イメージ）とが大いに関係する。例えば斬首されて死んだ人は、「鬼世界」では頭のない鬼である。大体このような理由から、『三国演义』では、関公は殺されたのち再び霊験を現し、大声で「頭を返せ」と叫んだ。さらに別の中国民族の伝統的思想は「身体」、「皮膚髪」は全て父母から受け継いだ。必ずいとおしみ大事にしなければならない。それを傷つけ死なすことは少しでもあってはならない。でなければ「あの世」において、——「鬼世界」で先祖に会う面目が立たない。これが中国の民族性にしっかり染み込んでいる「孝」の観念である。以上の視点に基づき、「全尸」と「面子」との関連性はあまりない。そして安岡の著作で引用している『続今古奇観』の中の『機中機賢秀才報怨』の物語では、「面子」と連結するのも極めて無理であろう。秀才の娘が強姦されたのはもちろん恥辱の出来事である。特に中国の古代、貞操問題は現代と比較して何万倍も擁護された。この物語ではその仇を打つ方法が「機中機」という言葉によってたいへん卓越していることが強調されている。すなわち「策略と策略が噛み合った」「機知に富んでユーモアがいっぱいである」ものとして高い評価を受けている。一般の「面子」問題を総括されるようなものではない。日本人の安岡秀夫はたくさんの中国の古代の書籍を読んでいるが、明清の時代の小説を引用するにあたって、「ゆとりを持って対処する」程度には達していなかったということがいえる。少なくとも当時、彼は中国人が誰も触れたことのない問題に触れた点である。中国人が古代の書籍について安岡より詳しいかどうかにかかわらず。しかし、安岡はやはり中国の民族性に関して正鵠を射た意見を述べている。

「その他近しい血族縁戚の間柄などでも、彼我の資産や身分に少なからず懸隔の生じた場合には、貧乏とか身分の卑しくなった方の家族は、……不面目に思っただけ（故意に）疎遠になり、終には全く交通を絶ってしまう例も甚だ多いようである。（親戚が金持ちや大官になれば、ヒドク無心を吹っ掛けたり、その幕僚とか食客とかになりたがる例も甚だ

多い。) これも面子を過度に重んじる一影響と認められる」<sup>(53)</sup> これは安岡が挙げた『嬰寧』で姨表（母同士が姉妹関係にある親戚）の間の生計の格差が大きいために生み出した「自然」な疎遠、この「自然」は、もちろん「面子」が生み出した無形の「裂痕」（割け目の跡）が含まれている。

「体面といえば精神的、また儀容といえば物質的と……まず体面のことから申せば、一個人の体面とか、一家の体面とか、色々あるが、要するに、支那人は裏面は如何であっても、表向きは体面すなわち普通の支那語に用いられる『面子』（メンツ）だけは、是非とも綺麗に保って行きたいという感情が、特別に強いのである。支那の小説などに、よく『我面を看よ』とか『誰の面を看て云々する』とかいう言葉がある。……ツマリ面は体面で、面を看るとは『顔を立てる』とか『顔に免ずる』とか、『誰々の体面に対して斯（か）くかくする（このようにする）』とかの意味である。そのような言葉を用いることは、日本でも、必ずしも珍しくはないが、支那の小説類に、あまりにも沢山現れるのを見ると、これも支那人の体面癖の一證（証）になるのである。」<sup>(54)</sup>

ここで安岡が挙げたのは、第十六回、『三国志演義』の「呂奉先戟を轅門に射、曹孟徳師をイク水に敗る」にも、「布曰く、爾（なんじ）両家、我が面上を看て、俱に各々兵を罷めよ」、また第十四回「曹孟徳駕を移して許都に幸し、呂奉先夜に乗じて徐郡を襲う」に「張飛が、呂布の舅曹豹に酒を強いて、終に之を鞭たんとしたとき、曹豹いかんともするなく、只得（ぜひなく）告求して曰く、翼徳公、我が女婿の面を看て、しばらく我を怒し罷（ゆる）めよ」<sup>(55)</sup>である。

「而（しか）もその体面癖面子癖は、直ちに虚礼となり、空言となり、衒（げん）学となり、装強となり、偽君子ともなり、似而非慷慨（こうがい）家となりて、彼の国の社会に、一種堪え難き臭味を漂わせ来るのである。」<sup>(56)</sup>

「体面癖から起こる支那政治家の対外態度は、……只（ただ）体面を保ちたい一心に、何時まででも左又右持して、なかなかウンとは言わない。ところが、対支那人的呼吸を吞込んでいいる外国政治家は、支那人の

惜しがる体面を、強いて押潰すことを避け、表向きにはその体面を保たせるような形式を設けて、内実は旨く肝腎な目的を達するのである。公然の条約の外には密約を結ぶなど、正にその一方法である。……諸外国は長年のあいだ、これを対支（那）外交の鍵としたものだ。」<sup>(57)</sup>

これらの安岡の意見は、すべて一定の道理がある。その中で一部は魯迅の見解と一致した意見である。魯迅は『メンツについて』の中で似通った論述が見られる。特に外交官の面子のところでは、魯迅の見方ともっと似通っていて互いに補完している。この官僚の「面子（メンツ）」の危害は甚大で、それはどうしても国家を売り渡すほどの膨大な不利益といえる。安岡秀夫の提起したものは中国人を目覚めさせる働きがあると考えられる。

安岡の第三編「運命に安んじて物事を諦め易き事」と第九編「迷信の深い事」でもいくつか的を射た意見を述べている。彼は次のように述べている。

運命に安んじ易く、物事を諦め易いことも、また多数支那人の一特徴と認められる。元来宿命観は、世界を通じて、何れの国何の地にも存在する。……ところが支那人は、他の諸国人に比して、この宿命観が、特別に濃厚なように見受けられる。……。<sup>(58)</sup>

その外支那人は、甚だしい不幸に陥った場合も、運命だ『没有办法子』（仕方がない）だと諦める例が、甚だ多い。つまり運命に服従し易い国民と（謂）いってよからう。水害飢饉等で、急に零落した者は、例の面子癖で、乞食となることなどである。非常に苦痛に思うはずなのに拘らず、愈々（ゆゆ、ますます）乞食になるの他、活路なしと、自ら認める暁には、案外思い切りよく、乞食になり下がるのである。」<sup>(59)</sup>

支那人の迷信として、最も顕著なものは、『風水』の説である。……この術（巫術、葬術）に随（したが）う遅起きは、大は国家の安泰を保ち、小は一身一家及びその子々孫々の繁栄を来すと信じるのである。すなわち西洋のフィジオグラフィ（地相学）と、その濫觴（起源）は相似たものと想像される。併（しか）し風水も近代に及んでは、都城宮室の造営等にはあまり応用されず、むしろ単に葬地を択むの術となってしまうた訳である。」<sup>(60)</sup>

風水によりて葬地を択むの一事は、支那人の最も熱心、否熱狂せるところで、これが為には他の一切の利害をも、犠牲に供してしても惜しまない。あるいはこれが為に、大訴訟が起こったり、大争闘が起こったりするのである。過去二十余年来、支那における鉄道の敷設が盛んになってから、その路線がある地域を横ぎる為、その地域の風水を悪くし、折角その地域を択んで墓地をこしらえた者が、大損害を受けることになったといつて、苦情が持ち上がることもあれば、あるいはまた鉄道路線の為に、一地方全般の風水を害することになったといつて、一揆暴動を生じた例など、珍しくない。また他の一例を挙げると、光緒帝や醇親王の父で、宣統帝の祖父たる故醇親王の死んだとき、北京城外のある地に葬ったが、その土地に墓所を設けた結果として、醇親王家は、三代にわたって、天子を出すことになったという風水上の説が行われ、それが故西太后の耳に入つて、段々と詮議を遂げると、墓地の中に、一株の公孫樹があつて、これがため、墓地の風水が、大変好いのだということがわかり、太后が、大いに妬忌の念を生じて、その木を切り倒させたという話がある。この話は事実だとすれば、その風水の説が、奇妙に敵中している。すなわち光緒、宣統の二帝が、醇親王家から出たばかりではなく、現代の醇親王は、宣統帝の摂政として一時は事実上の天子になったから、帰す所、三代の天子になる訳なのである。風水の信仰の甚だしい例を小説中に求めると、……。」<sup>(61)</sup>

上述のように安岡は、「運命に安んじて物事を諦め易き事」と「迷信の深い事」などについて言及したが中国人を「中傷する」嫌疑は見られないようである。安岡はそれに一定の節度をわきまえて中国民族の弱点を指摘した。このような言論は魯迅の執筆にもよく見られる。

宿命となれば逃げられぬし、神になれるような果報を受けるのなら一層満足がゆくというものだ。かくて、殺人者は責められず、殺されたものも悲しまれず、眼に見える摂理が自然と働いて、おのおのその所を得さしめるのであるなら、他人が世話を焼く必要などないのだ。<sup>(62)</sup>

もちろん、これは貧乏に安ぜよと教えているわけで、(その根拠は「運命」である) …… (63)

「天によりかかって飯を食う説」は、我が国の国宝である。(64)

「迷信の深い事」に関する問題については、安岡は迷信と現代化の間の矛盾を特に強調した。風水を盲信することと鉄道建設時の様々な紛争を語った。世界は現代化を邁進しているが、風水を盲信する事がこの現代化の道筋に最大の頑強な障害として立ち塞がっている。魯迅は1919年の「随感録・四十二」『熱風』の中で面白い物語を語っている。風刺する意味はなくはない。

イギリス人ジョージ・グレイは、ニュージーランド総督をしたとき、『ポリネシア神話』という本を書いたが、その序文で、彼の著述の目的はべつに学術のためだけだったわけではなく、大半は政治上の手段であった、と言っている。彼によると、ニュージーランドの土人は、理屈で説得しようとしてもまったくうけつけないが、彼らの神話の歴史のなかから似たようなことを一つ抜き出して、それを例として酋長や祭司たちに話して聞かせると、たちどころに納得する。たとえば、鉄道を敷設しようとする場合、それがいかに利益をもたらすかということをいくら説明しても、決して肯(き)こうとしないが、もし神話に基づいて、昔なになしという大仙人が一輪車を押して虹の橋をわたったが、こんど、その真似をして道をつつくりたい、というふうに言えば、どんなことでもとおらぬことはないというのである(原文はもう忘れてしまった。以上に述べたことは大意にすぎない)。中国の十三経、二十五史は、まさしく酋長や祭司たちが心を一つにして尊奉する治国平天下の系図であるが、今後もし、これが翻訳されて、すべて土人との交渉を持つ「西哲」は、みな、一人に一冊これを手にするといふほどにひろまったとすると、これは、我々の「東学西漸」をたすけるものだといふので、土人は大喜びさせるだろう。だが、その訳本の序文には、どんなことが書かれることになるのか、それは知らない。(65)



『随感録・四十二』の始まりで、魯迅は「友人がいうに、杭州英国教会の一人の医者は、医学書の第1章序で、中国人を土着の人と呼んでいる。私は初め大いに気分が良くなかったが、よくよく考えて見ると現在はまだ我慢するしかない状況である」。この点から魯迅は中国民族の悪しき民族性を自己批判し、それは安岡秀夫が中国人を批判するよりもさらに激しい。中国人は「風水が破壊される」とみなし、騒ぎを起こす。それはおそらく鉄道の建設部門が喬治葛来（ジョージ・グレイ）のように神話の物語を作らなかったからである。見た所「迷信の深い事」という点では、魯迅と安岡秀夫の観点は基本的に一致している。

安岡秀夫は中国国民性における「個人主義と事大主義」についても彼独自の見方がある。彼は第五編「同情心乏しく残忍性に富む事」の中で中国人の極端な個人主義と事大主義の例を挙げて論及している。中国の小説で罪のない人の乱殺のいきさつに対して極めて反感を持っている。さらに『水滸伝』の「張都監血濺鴛鴦樓」を例として挙げている。行者武松は中国人の心の中の偉い英雄である。しかし、血濺鴛鴦樓の事件では、行き過ぎた残忍性が表現されている。「切り捨て御免」の感じである。われわれは、往々にして武松の景陽岡での武勇によって彼が血濺鴛鴦樓事件で負った「むだな血生臭い罪惡」を見過ごしがちである。その他、安岡はさらに『煬帝艷史』の「陶榔児盗小児」の物語を例に挙げた。麻叔謀について運河を掘る際、風水の良い家の土地を守るため、あらゆる手段を講じ皇帝の機嫌を取り、そうして子供を殺害して調理して、偽って美味しい子羊の肉として献上した。このような極上の「材料」を探すために彼は周辺の沢山の子供を殺害した。この恐怖の物語は魯迅もかつて取り上げたことがある。魯迅は『二十四孝図』と『朝花夕拾』「後記」でこの「児童の惨殺家」を取り上げた。

私は第三篇で「二十四孝」について述べた際、その冒頭のところで、北京で子供を脅す時に言う「馬虎子」(マーフーツ)は「麻胡子」(マーフーツ)とすべきであると言った。ところが、それが間違いであったことを今になって知った。「胡」は叔謀の名である「祐」(こ)とするのが正しかったのだ。唐の李濟翁があらわした『資暇集』巻下に、「麻胡に非ず」と

題して、次のようにある。

「世間では子供を脅かすときに『麻胡が来たぞ』と言う。出典を知らない者は、麻胡とは髭面（ひげずら）の神で人々を裁く者と思っているが、これは違う。隋の將軍麻祜は生來酷薄殘忍な男であつた上、煬帝の命で大運河開削に当たったときの威勢たるや大変なものだったので、幼い子供たちまでがその名を聞いただけで恐れおののき、互いに『麻祜が来るぞ』と脅しあつたものであつたが、子供のことで正しい音を知らず、祜を胡に訛つたものである。……。<sup>(66)</sup>

魯迅のいう「性酷虐（生來酷薄殘忍）」は、安岡秀夫のいう「同情心乏しく殘忍性に富む事」とも相通ずるところがある。そしてこの極端な表現は、個人主義の極致と密接で切り離すことができない。まさしく個人主義者の眼中には、人と人の間の苦痛や喜び、気持ち良さと憂鬱さは相通じるとは思われないから、さらにひどい個人主義者は自分の喜びを他人の苦痛の上に築き、他人の憂鬱さに自分の気持ち良さの花を咲かせる「肥料」とする。安岡秀夫は又一步進んで中国の國民性の「個人主義と事大主義との事」で論述している。安岡がはじめに語ったのは中国の「確固不拔の」大家族主義は個人主義の「天敵」ではないか。もしかしたらある人が言うように、中国の家族制度、特に大家族制度は中国人の個人主義者への道を阻んでいるのではないか。そのほかの言い方は中国の同業組合と同郷觀念（意識）によって中国人は個人主義者になれないのではないか。

安岡はいう。

「彼らの家族制度がその特徴であることは、争えない事実である。しかしながらこれは支那の骨肉間の情愛格別に深厚なためだと解することができないのみならず、彼等の血縁に対する感情は、却って我国人などよりも冷淡であつて、……」<sup>(67)</sup>「支那人の倫理的思想には、個人主義、享樂主義、打算主義を要素とする部分が甚だ多い。」「その大家族なるものの中に、一步踏み込んで見ると、前篇にも述べた通り、妻と妾と、姑と媳と、嫂と弟媳と、または伯叔父と甥姪となどの間に、殘酷な鬭争が

繰り返され……」<sup>(68)</sup>

と述べて、「その事実は表面の家族主義を全く裏切って」往往にして「個人主義の極致」を見せたものであると述べている。

彼は「同業者」と「同郷者」の団結と協同行動についても個人的見解があり、これらの団結は

「元来は個々の利害観念から出発しているもので、その点は支那人の地方部落の団結と同様、斯（か）くせざれば各自の生業（甚だしい場合は生命さえも）を防衛することができないという抛りどころない事情に拘制せられてできた習慣にすぎないのである。」<sup>(69)</sup>

と述べている。

「事大主義」について、安岡秀夫は「又支那人の弱を侮り強を畏（おそ）れる根性から出た事大主義は、全篇にも述べた通りで、又余りにも明白な事実であるから、ここに細説するまでもないが、その最も顕著な例は、過去六七十年來、支那国そのものが外国に対した態度であろう。殊（こと）に阿片戦争のごときは、当初相手が只の商人だと見縊（くび）っていた間は、馬鹿に威勢が好くて、莫大な阿片の焼棄というむしろ痛快な処置を断行したが、さて戦争になって手きびしい目にあわされるとなると、必要以上に恐れ入り、今日までも国の体面を没却した屈辱（外国人の税関支配の如し）を継続しているのである。」<sup>(70)</sup>と述べている。

彼が述べた例は、もちろん検討すべきである。しかし、ここでは例はもともと不適切でないとすると論点の本質には影響を与えないものだ。弱い者を泣かせ、強い者にへつらう事大主義は確かに中国人の国民性の「悪しき根性」（劣った性格）の一つと言えそうである。阿Qの生涯において特にはっきりと表現されている。

もし安岡秀夫の見解と魯迅の言論を互いに照らし合わせてみると、深いところと浅いところの差はあるが、そこに存在する精神は一致すると思われる。魯迅はいう。

「事大」は、歴史上、あった。「自大」も、実際によく見かける。「事大」と「自大」は、あい容れないけれども、「事大」の故の「自大」は実際によく見かける——「事大」さえもふさわしくない一切の人々を傲然と見下すのである。<sup>(71)</sup>

(「事大」: 大国に事(仕)える意味。自分より強いものに追従すること。「自大」: 大物に追従することによって自尊自大な気持ちになること。)

Th. Lipps は、その著書『倫理学の根本問題』のなかでこんなことを述べている。人の主人である者は、容易に奴隷に変わるものである。彼が、一方では、主人になってもよいと思うのなら、一方で奴隷になってもよいと思うのは当然である。したがって、威力が失墜するやいなや、必死になって新しい主人の前にひれ伏すわけである。……中国では、よく、「下に横柄な者は、上に事(つ)かえると決まって諂(へつら)う」と言う。<sup>(72)</sup>

魯迅は、最も典型的な例として、孫皓をあげた。「(孫皓は)呉を治めていたときには、傲慢残虐な暴君であったが、ひとたび晋に降るや、卑劣破廉恥な奴隷となった」。<sup>(73)</sup> 彼が在位の時、自由に臣下と宮女を殺戮して、各種の残虐な刑を作り出した。悪どい手を使い切ったというべきである。一旦晋に下ると、恥じることなく媚びへつらい、奴僕に甘んじる。魯迅はリップス(Th. Lipps)の『倫理学の根本問題』を読んで「事大主義」の啓発を受けた。正にこの本のいう「下に横柄な者は、上に事えると決まって諂う」<sup>(74)</sup>ということを、魯迅は阿Qが趙旦那のビンタを食らうことによって喜ぶ「自惚れ屋の事大主義者」として描いた。魯迅はさらに一歩進めて「暴君の統治下の臣民は、たいいてい暴君よりさらに暴虐である」<sup>(75)</sup>と推理した。

こうした情況は、これまでの支配階級の革命が、一つの古い椅子の争奪に過ぎなかったことを物語っています。おしのけるときには、その椅子がにくむべきものに思えますが、いったん手に入れてみると、こんどは宝物のような気がしてきますし、かたわら自分がその「古い」ものと

意気投合していることを自覚するのです。……三下やつこが主人になると、「旦那さま」という呼び方を廃止しようとはしませんし、そのふんぞり返りぶりも、おそらくもとの主人よりもっと念が入って、もっと滑稽でしょう。それはちょうど、小金をためこんだ上海の労働者が小さな工場を開くと、こんどは労働者にこの上ないひどいあつかいをするのと同じことです。<sup>(76)</sup>

魯迅はここで暴君と臣民、主人と奴僕、経営者と従業員をみんな登場させ、一律に論じている。それはその中で中国の民族性を観察できたためである。これから推測して安岡秀夫の事大主義に関する論述は、基本的に成り立つのではないだろうか。

前述の一通りの比較から我々は安岡秀夫の意見に対してありふれたこととして見ることはできない。我々はこれまで安岡秀夫の生涯を決して理解していなかった。しかし、彼の書を読んでみると、やはり彼の知名度はあまり高くないが非常に学識の高い人であると思われる。安岡は1873年（明治6年）4月4日生まれで、1892年（明治25年）慶應義塾大学を卒業。1893年「時事新報」入社、新聞社では政治部、社説そして編集部などの部署で働き、1923年（大正12年）編集長となった。安岡は神学、文学、美術に関心が深かった。彼と福井准造の共著『十九世紀列国史』は1897年出版。彼の単著『日本と支那』は1915年に出版された。<sup>(77)</sup> このことから分かるように、我々が前に引用した安岡秀夫の中国に対する見解は偶然のものではなかった。これまでの安岡秀夫の評価（魯迅全集の編集者の注釈）は厳しすぎたのではないだろうか。

魯迅は『小説から見た支那の民族性』を無理にこじつけたことが多いと認識したのは、主に「享楽に耽り淫風盛なる事」（第十篇）の一章中で述べた突飛な意見である。そして魯迅の安岡への批判の意見で、最も具体的なのは、全てこの一章に絞られている。スミスは聖職者で「淫蕩旺盛」に対しての理解は乏しい。しかし、安岡はこの章で、サンガー（Sanger）の『売春史』（*History of prostitution*）、ウイリアムス（Samuel Wells Williams）の『中国』（*The Middle Kingdom*）を参考に行っている。サンガーの引用では、

「『支那人は世界における最も淫蕩な国民の一つである』（サンガーによる引用）。……その最もわかりやすい証拠は、彼らの食事の材料及び料理方法の多くが、性欲上の目的の下に取捨選択される一事である」。(78)

またウイリアムスの引用では以下のように紹介している。

『この多情なる国民は、食物の原料を求めるに当たりても、多くはその想像せる性欲的効能を目標としている。国外より輸入せられる特殊産物の最多数は、前述の効能を含むと認められた物である。……大宴会における数多き献立の大部分は、ある特殊の強壮剂的性質を含むと想像される奇妙な原料から成り立っている。』（ウイリアムスによる引用）(79)

安岡秀夫は彼らから影響を受け、具体的に自論を展開している。

元来支那料理の特徴は、……第一には支那人の淫蕩的民族性、第二には彼ら自ら食物のこの特殊性質をば明白に敏感に意識している。…。

この点について、(更に) 具体的に例を挙げると以下の通りである。

(一) 魚鳥肉の内臓や、魚の鰭（ヒレ）など、普通の料理では、残り滓として取捨てられるものをば、却って余計に珍重し、これを主要なる料理の原料とする。これは第五篇において支那人の儉約を示す一例にも引いたのであるが、その主要な目的は、やはり強精補腎にあるのだ。動物の内臓に、この目的にそうものあるいは刺激性のものが多いことは、動かすからざる事実で、ホルモンのごときもまたこれに属する。

(二) 桂花を交る料理が多く、たとい真実それを交えなくとも、その名を冠するものが少なくない。桂花はやはり例の効能があるとせられている。この効能を目的とする薬剤にも、ほとんどよくこれを調合してある。……

(三) 支那料理に鰕を用いることが甚だ多い。これは我が国における支那料理店でも誰しも気付くであろう。鰕が食料として最も性的効果に

富むことは、彼の国人の夙に信ずる所であって、……。

（四）筍と支那人との関係も、またちょうど、鰾と同一である。彼の国人の筍好きなことは日本人以上といえる。可笑しな話だが、あるいはその挺然（ていぜん）たり翹然（ぎょうぜん）たる姿勢から想像が導かれたのかも知れない。

（五）支那料理の総てを通じて、何らかの香料の応用されないものはない。香料の刺激的作用は、支那ならずも、これを知るには苦しまないであろう。

（六）蜜餞果物の多いことも、この点における一特徴である。蜂蜜は興奮剤、強壯剤として、古来支那人はもちろん、我が国人の間にも信ぜられたところである。

（七）支那人は阿片に耽（ふ）るのも、その目的は、単に快眠を貪るためのみでなく、主として性欲的刺激を受けるためである。相公を相手の情事を叙した小説『品花宝鑑』（一名『怡情逸史』）などにもこの辺の実際の光景を叙した部分が多い。ところがこの目的の下に、阿片を料理に応用したものもまた少なくない。『芙蓉』（阿片）の名を冠する料理は、支那人の最も悦ぶ所である。

そのように支那料理の原料と料理法とかが、強精補腎を主要な目的とする事実、如何に彼らのその道に熱心なるかを証明するものであるが、この外やはり同じ目的の薬剤について、彼らの研究の極めて熱中であることも、また顕著な事実である。支那では、道家の一派として『房中家』なるものを存じ、性的衛生に関する一種の研究が行われ、その研究を述べた書物もかなり多いが、これらの書物の中でも、有名な『素女妙論』『玉房秘訣』『玉房指要』『洞玄子』『探戰春方』『三峰採戰』等には、その関係の薬方が却って沢山掲載されている。<sup>(80)</sup>

安岡秀夫の引用と自ら発見した意見は、討論する価値がある。これが金持ちの大宴会のメニューと強精補腎と関係あるというからには、それならばこれは金持ちの「食飽思淫欲」（腹いっぱい食べて淫欲を燃やす）の反応であり、民族性の関係はあまりない。貧乏人は飢餓で苦しんでいる、彼らはどうして

放縱に振舞うことができようか。その上その他の国のお金持ちも同様にこの方面にはもっぱら精を出している。各国には大体各国の性科学があるのではないだろうか。したがって、中国がこの方面の専門書がいくらか多いので、中国が淫蕩的民族であるという結論を下すことはできないだろう。我々は、安岡秀夫（サンガー及びウィリアムスを含む）は、「人間の本性」の問題を誤って「民族性」の問題とみなしたと考える。魯迅はこれを思わず吹き出したのは当たり前の対応だと考える。

しかし、魯迅が安岡秀夫を批判すると同時に、なぜはっきりと中国のメニューと性欲増強との関係を否定しなかったのか。魯迅はまず個人の経験から出発して安岡の意見を否定した。「私は大宴会に陪席する光栄に授かったことがない。ただ数回だけ中宴会を経験し、ツバメの巣、フカのヒレを食べたことがある。思い出すと、宴会中もその後も、特別な好色の気持ちは出てこなかった。」続けて彼は弁明して言った「宴席で中国料理は確かに多くは濃厚であるが、しかしながら国民の日常の食事ではない。中国のお金持ちもとりより放縱で度が過ぎているが、酒肴（しゅこう）と強壯剤を一緒にするまでには至らない」そして魯迅の結論は次のとおりである。

「中国を研究する外国人は、あまりに考えすぎ、あまり感じすぎるので、しばしば、このような——『支那人』を上まわる性的過敏——の結論におちいってしまうのだ。」<sup>(81)</sup>

しかし、この結論は全面的否定ではない。「薬膳」と「滋養」に凝っている金持ち階級は、もし彼らの食事メニューと強精補腎は少しも関係がないといえ、それはまた人々を納得させることはできない。安岡のいう中国料理の薬用成分は、大部分はやはり科学的根拠がある。

われわれはこれまでスミスと安岡の見解の良し悪しをそれぞれ述べてきた。スミスは中国での宣教活動二十年間で大量の直接資料を集めた。中国の民族性に対するかなり深い研究をした。しかし彼は聖職者で、彼の最終目的は中国においてキリスト教を普及することにある。安岡秀夫は有名ではない



が学識豊かな漢学者で、彼はちょうどスミスの空白の部分埋めて、小説、戯曲等から中国国民性の謎を解説した。彼は中国の元、明、清の小説にかなり該博な知識を持っている。彼は中日比較研究をして、若干の価値のある意見を発表した。その中に一部の意見は人々を納得させられないものが含まれていた。スミスの著書は安岡の著作と青年時代の魯迅に影響を与えた。魯迅が1926年に北京東アジア会社で安岡の本を入手した後、やはり深い印象が残り、度々安岡の小冊子を提起した。

魯迅が彼ら（スミスと安岡）とは異なったのは、中国の国民性の研究は強烈な愛国主義からの目的であった。彼は中国の民族が世界の民族から締め出されるのを恐れ、中国人が世界に留まることを望み、彼は国民性改造のために代価を払った。それでは魯迅はどのように中国の国民性を研究したのだろうか。彼は中国の文化の古い伝統の糟粕（そうはく）（悪いところや役に立たない部分）に遡り、古い硬直した亡霊がどのようにして中国国民に取り憑いたのか、同時に彼は当時の国民性を研究し、中国の伝統と比較して結局どこが同じでどこが異なっているかを研究した。彼は中国の面子を研究し、彼独自の見解を提案し、そして自分の特別な発見を応用した。『阿Q正伝』にも詳説される「精神勝利法」これこそが面子よりも国民性の急所を鋭く突いている。解放（1949年の中華人民共和国建国）以来、中国は階級性を究極の境地まで強調し、窮地に陥った。そのために国民性が共存できない状態をもたらした。中国の労働者階級の弁証法がどこに行ってしまったのだろうか。それゆえ魯迅の国民性研究は、しばしば人々から魯迅の限界性の現れだとみられた。実際に一つの国家民衆は度々彼らの共通性を現す。これは常識以下の知識である。魯迅の国民性研究は歴史的功績のみならず、今日ないし二十一世紀のすべてにおいて深遠な現実的意義がある。

スミス『中国人気質』は、張夢陽、王麗娟の訳文（『中国人気質』、敦煌文化出版社1995年）を引用した。安岡秀夫『小説から見た支那の民族性』は、本論文執筆者の一人、澤谷敏行の訳したものを使用した。澤谷敏行は蘇州大学現代文学修士である。

訳者：澤谷敏行（蘇州大学訪問教員）

徐志紅（西安交通リヴァプール大学ランゲージセンター日本語教師）

【訳注】

<下>

- (46) 『魯迅全集』第四卷 華蓋集続編「即座支日記」七月四日 p.376
- (47) 『魯迅全集』第四卷 華蓋集続編「即座支日記」p.381 注 20
- (48) 『魯迅全集』第十五卷「書簡Ⅱ」p160 注 1
- (49) 『魯迅全集』第四卷 華蓋集続編「即座支日記」七月二日 p.367
- (50) 『小説から見た支那の民族性』（聚芳閣 1926 年）第二編「過度に体面儀容を重んずる事」p.7-8
- (51) 『魯迅全集』第八卷「且介亭雑文二集・現代支那に於ける孔子様」p354
- (52) 『魯迅全集』第十三卷「兩地書・四」pp.30-31
- (53) 『小説から見た支那の民族性』第二編「過度に体面儀容を重んずる事」p.16
- (54) 同上 pp.17-19
- (55) 同上 p.18
- (56) 同上 pp.21-22
- (57) 同上 P.22
- (58) 『小説から見た支那の民族性』第三編「運命に安んじて物事を諦め易き事」p.27
- (59) 同上 p.30-31
- (60) 『小説から見た支那の民族性』第九編「迷信の深い事」pp.144-145
- (61) 同上 pp.145-146
- (62) 『魯迅全集』第一卷「墳・目を開けて見ることにについて」p.310
- (63) 『魯迅全集』第七卷「花辺文学・運命」p.480
- (64) 『魯迅全集』第八卷「且介亭雑文二集・天によりかかって飯を食う」p.409
- (65) 『魯迅全集』第一卷「熱風・随感録・四十二」pp.408-409
- (66) 『魯迅全集』第三卷「朝花夕拾・後期」p.189
- (67) 『小説から見た支那の民族性』第六編「個人主義と事大主義との事」p.91
- (68) 同上 pp.96-97
- (69) 同上 pp.92-93
- (70) 同上 p.100
- (71) 『魯迅全集』第八卷「且介亭雑文二集・題未定 草（三）」p.397
- (72) 『魯迅全集』第一卷「墳・写真を撮ることなどについて」p.250
- (73) 同上 p.250
- (74) 同上 p.250
- (75) 『魯迅全集』第一卷「熱風・六十五 暴君の臣民」P.448
- (76) 『魯迅全集』第六卷「二心集・上海文芸之一瞥」pp.130-31
- (77) 『大正人名辞典Ⅱ下巻』1987 年、日本図書センター、p.111、『新聞人名辞典第2巻』1988 年、日本図書センター、p.57

- (78) 『小説から見た支那の民族性』 第十編「享楽に耽り淫風盛なる事」 p.160
- (79) 同上 pp.160-161
- (80) 同上 pp.161-164
- (81) 『魯迅全集』 第四巻 華蓋集続編「即座支日記」 七月四日 p.373

#### （訳者）付記

魯迅の引用については、すべて『魯迅全集』日本語版（学習研究社 1984 年（昭和 59 年）発行）から引用した。また作業では、『魯迅全集』人民文学出版 1991 年版を活用した。

アーサー・H・スミスの、“*Chinese Characteristics*” の引用については、日本語版羽化・渋谷保訳（1896）『支那人気質』は、翻訳に若干過不足がある点、言葉が古く理解が困難な点などから、白神徹訳『支那の性格』を参考としながら、最終的に石井宗皓・岩崎菜子訳（2014）『中国人的性格』中央公論新社を引用した。また作業では、これに加え中国語版、劉文飛・劉曉陽訳『中国人的気質』（Arthur・Henderson Smith, *Chinese characteristics*, Oliphant, Anderson and Ferrier, 1900 原文と二本セット）訳林出版社 2012 年 10 月発行を活用した。

アーサー・H・スミスの、“*Chinese Characteristics*” の中国語版について：

1896 年（明治 29 年）に博文館から羽化・渋谷保の翻訳によって日本語版『支那人気質』が発行され、1940 年（昭和 15 年）に白神徹訳『支那の性格』（中央公論社）が発行されている。『支那の性格』の「緒言」によれば“*Chinese Characteristics*” は、もともと上海の「北清日報」“*North China Daily News*” に掲載された英文の論文であった。1890 年に初めて上海で出版され、当時中国および東洋諸国に広まったとある。『中国人的性格』の「訳者解説」によれば、1894 年に全体を 40 章から 27 章に改訂したアメリカ版が発行され、世界に広まったとある。そして本格的な中国語版は 1995 年の張夢陽、王麗娟訳『中国人気質』である。1890 年に出版されてから 105 年後突然に出現した。何故なのだろうか。そしてなぜ 2010 年代に入って中国語版が次々に出版されているのだろうか。『中国人気質』『中国人的素質』『中国人的文明与陋習』『中国人的特性』『大国与小民』など確認できるもので 40 数冊を超

える。最新版は陶林・韓利利訳『中国人的性格』2018年江蘇鳳凰文芸出版社である。こういった現象も大変興味深い。今回の翻訳作業では、日本語版と中国語版を使用したのが、その解釈の違い、翻訳に過不足があることが明確になった。翻訳する際、自国の文化や社会が大きく影響したのではないかと推測している。

この論文の作者范伯群教授は2017年12月10日に逝去され、その追悼の意味を込めてこの論文を日本語に翻訳することを決心し、徐志紅先生のお力をお借りし訳出できたことは大変嬉しい限りである。しかし、なにぶん付け焼き刃の翻訳であるため、間違いや不十分な点が多々あると思われる。ご指摘いただければありがたい。今回の翻訳に関しては、佛教大学の李冬木教授にはひとかたならぬお世話になった。また発表の場を提供くださった中国言語文化研究会に心から感謝申し上げます。

澤谷敏行